５．１　ルーブリック評価

本校では生徒の資質・能力をはかる指標のひとつとして独自のルーブリックを作成し、定期的に評価を行っている。ルーブリックは本校で育成したい生徒像でもあり、これを用いた面談も行いながら、総括的評価としてだけでなく、形成的評価として活用し、生徒の目標設定等に活かしている。ここではルーブリックの推移を分析し、本校生の特徴や学年ごとの特徴等について考察する。

（1）はじめに

平成 27 年度に開校した本校では、「未来創造型教育」を目指すグランドデザインの下、開校直後４月、教員全員による教員研修会（本校では「未来研究会」と称する）を実施した。県下全域から赴任した教員集団はそれぞれの想いを抱きスタートを切った。そこで、新しい学校・教育としての「育成したい生徒像」としての共通イメージを持ち、互いに意思疎通を深めていくために、ワークショップ形式での意見交換会を行った。

開校当時、入学してきた子供たちの８割は原発事故で避難を強いられた地域の出身であった。子供たちの状況は多様だが、数カ所の避難先を転々とし、学力に課題を抱えている子供も多かった。また、避難する中で不登校となってしまった生徒も存在した。一方で、地元への愛着や、世界からの支援に対する感謝の気持ちから、社会に貢献したいという意欲の強さも感じられた。「この子たちが卒業する３年後に、どのような姿になっていて欲しいか」教職員全員が付箋に書き込み、出し合いながら議論を重ねた。

研修後、「育成したい生徒像」に必要な「育成したい能力」を分析し、共通項をまとめると同時に、本校の校訓である「自立」「創造」「協働」を意識し、福島県双葉郡教育復興ビジョン、OECD キーコンピテンシー等の内容を踏まえ、本校のルーブリックを作成した（巻末関係資料参照）。

ルーブリックの言葉の一つ一つに、教職員の感覚や想いが反映されている。例えば、「寛容さ～異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとすることができる」という項目である。この地域は今、放射線の安全性に関する考えが違う者同士の衝突や、避難した人と帰還した人の間での気持ちのすれ違いなどに直面している。考えの違う人を排除しても地域復興はままならない。仕事をする上でも生活をする上でも、考えの違う他者との関わり合い無くして成り立たない。考えの違う人を説得していく交渉力と言うより、異なる考えも受け入れ、ユーモアを持って接し、包み込んでいく「あたたかさ」が必要であると私たち教職員は考えた。この力が土台となって、別の項目に定義された「他者との協働力」が発揮される。

また、「表現・発信力～どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる」という項目も同じように教職員の想いが詰まっている。震災や原発事故のバックグラウンドを否応なく背負ってしまった子供たちは、世界中のどこに行っても意見を求められる。その時、言葉を発せず沈黙すれば、風化や風評に繋がっていく。例え突然指名されたときでも、自分の言葉で語れることが大切だ。話し相手のバックグラウンドも考えながら、定量的なデータの説明や定性的な復興のストーリーを組み合わせて、情緒にも働きかけながら相手の心を動かす力が求められる。

開校して真っ先に行ったのが、このルーブリックの設定である。目指す資質・能力を明確化して、その目標に向けて学校をあげて取り組むために、よそから借りてきた表面的な言葉では無く、自分たちの視点・言葉で定義することを重視した、学校全体の欠かせない出発点である。指導の重点の設定も、授業の展開も、学習の評価も、学校評価も、このルーブリックと関連づけながら展開していくことを目指している。

開校から７年が経過し、ルーブリック評価は学校に定着している。当初は年度終了時に生徒がどの程度資質能力を伸ばしてきたか検証する、いわゆる「総括的評価」として使ってきた。しかし、ルーブリック評価は本来生徒個人が活用すべきものであるという考え方から、生徒ひとりひとりにフィードバックし、その先の目標設定等に活かすような「形成的評価」として使うため、ルーブリック面談を導入した。面談は手間がかかるものの、メタ認知の向上にも役立っていると思われ、生徒、教員共に好意的に捉えている。また、2 年間かけてルーブリックの改訂を行い、令和３年度からＣの思考・創造力をＣ－１思考力、Ｃ－２創造力と分けて運用している。

（２） １期生（平成 27 年度入学生）から７期生（令和３年度入学生）のルーブリック評価（表 1～7，図 1～7）

表1　1期生　ルーブリック推移表	1年4月	1年7月	1年3月	2年2月	3年1月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.65	1.43	1.87	1.88	2.48	
B. 英語活用力	0.50	1.00	1.17	1.14	1.26	
C. 思考・創造力	0.74	1.32	1.78	1.94	2.43	
D. 表現・発信力	0.64	1.28	1.47	1.42	1.83	
E. 他者との協働力	0.85	1.59	1.77	1.80	1.90	
F. マネージメント力	0.84	1.37	1.75	1.71	1.96	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	0.62	1.03	1.50	1.43	2.04	
H. 寛容さ	1.06	1.73	1.98	1.77	2.07	
I. 能動的市民性	0.66	1.17	1.36	1.57	1.91	
J. 自分を変える力	0.78	1.38	1.78	1.81	2.04	
平均	0.73	1.33	1.64	1.65	1.99	

図１　1期生　ルーブリック推移グラフ

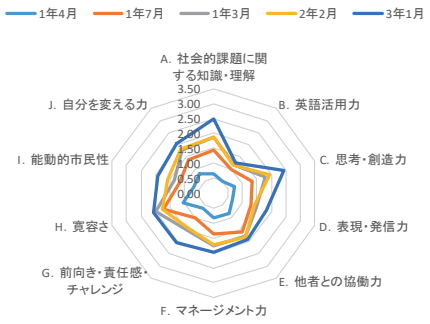


表2　2期生　ルーブリック推移表	1年4月	1年12月	2年6月	2年3月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.98	1.70	1.85	2.52	3.20	
B. 英語活用力	0.78	1.05	1.25	1.39	1.46	
C. 思考・創造力	1.28	1.70	1.98	2.47	2.71	
D. 表現・発信力	0.75	1.51	1.54	2.10	2.40	
E. 他者との協働力	1.35	1.66	2.04	2.45	2.73	
F. マネージメント力	1.23	1.60	1.73	2.17	2.55	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.00	1.45	2.00	2.35	2.86	
H. 寛容さ	1.66	1.77	2.11	2.47	2.95	
I. 能動的市民性	1.27	1.39	1.73	2.13	2.84	
J. 自分を変える力	1.40	1.56	2.04	2.19	2.63	
平均	1.17	1.54	1.83	2.22	2.63	

図２　２期生　ルーブリック推移グラフ

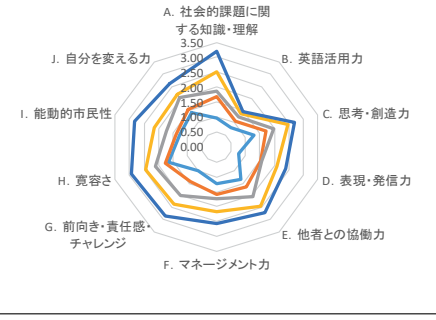


表3　3期生　ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年4月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.83	1.99	2.21	2.80	3.33	
B. 英語活用力	0.93	1.23	1.54	1.79	1.95	
C. 思考・創造力	1.34	2.07	2.37	2.81	3.18	
D. 表現・発信力	0.89	1.51	1.92	2.55	3.09	
E. 他者との協働力	1.51	2.18	2.52	2.71	3.21	
F. マネージメント力	1.45	1.96	2.27	2.58	3.10	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	2.06	2.15	3.47	3.35	
H. 寛容さ	1.73	2.39	2.70	2.92	3.39	
I. 能動的市民性	1.26	1.80	2.29	2.61	3.21	
J. 自分を変える力	1.39	2.25	2.43	2.86	3.15	
平均	1.27	1.94	2.24	2.71	3.10	

図３　３期生　ルーブリック推移グラフ

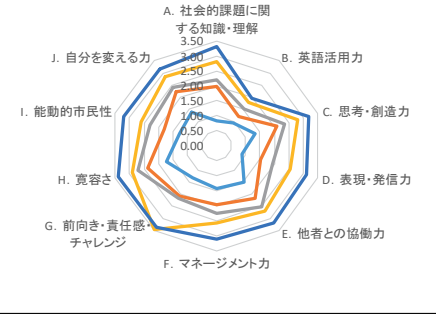


表4　4期生　ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年5月	3年10月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.69	1.71	1.96	2.48	2.83	
B. 英語活用力	0.89	1.29	1.28	1.59	1.70	
C. 思考・創造力	1.27	1.68	2.11	2.49	2.77	
D. 表現・発信力	1.04	1.40	1.75	2.10	2.36	
E. 他者との協働力	1.42	1.80	2.11	2.59	2.68	
F. マネージメント力	1.49	1.71	2.04	2.43	2.64	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.19	1.54	1.84	2.40	2.72	
H. 寛容さ	1.69	2.12	2.26	2.63	2.95	
I. 能動的市民性	1.38	1.63	2.09	2.39	2.81	
J. 自分を変える力	1.51	1.95	2.17	2.48	2.78	
平均	1.26	1.68	1.96	2.36	2.62	

図４　４期生　ルーブリック推移グラフ

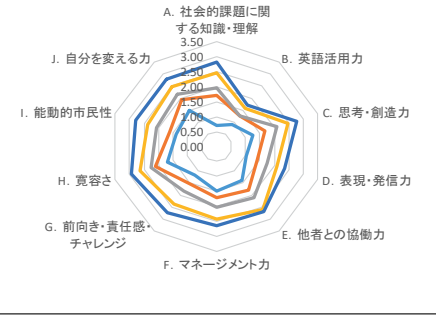


表5　5期生ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年6月	3年1月	推移グラフ
A　社会的課題に関する知識理解	1.43	1.70	1.94	2.98	3.04	
B　英語活用力	1.11	1.44	1.06	1.71	1.95	
C　思考・創造力	1.91	2.18	2.04	2.87	3.13	
D　表現・発信力	1.52	1.72	1.64	2.51	2.69	
E　他者との協働力	1.93	2.02	1.94	2.88	3.07	
F　マネージメント力	1.83	1.97	1.77	2.77	2.87	
G　前向き・責任感・チャレンジ	1.80	2.09	1.82	2.88	3.14	
H　寛容さ	2.25	2.31	2.38	3.15	3.15	
I　能動的市民性	1.62	1.81	1.78	2.81	2.92	
J　自分を変える力	2.16	1.98	1.91	3.01	3.04	
平均	1.76	1.92	1.83	2.76	2.90	

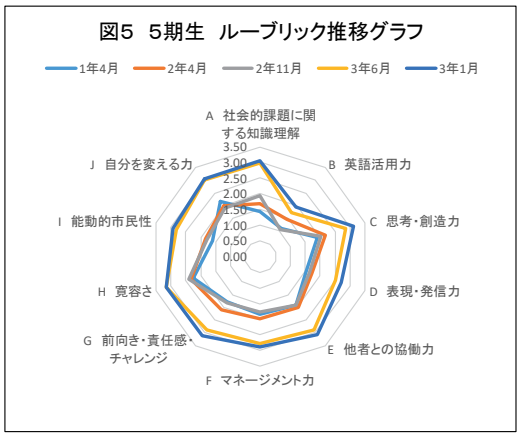


表6　6期生ルーブリック推移表	1年4月	1年11月	2年6月	2年10月	推移グラフ
A　社会的課題に関する知識理解	1.69	1.89	2.24	2.54	
B　英語活用力	1.23	1.27	1.49	1.75	
C　思考・創造力	2.05	2.07	2.45	2.67	
D　表現・発信力	1.78	1.72	1.92	2.29	
E　他者との協働力	2.15	2.20	2.23	2.51	
F　マネージメント力	1.96	1.98	2.15	2.49	
G　前向き・責任感・チャレンジ	2.20	1.99	2.39	2.45	
H　寛容さ	2.58	2.44	2.58	2.84	
I　能動的市民性	2.07	1.89	2.02	2.48	
J　自分を変える力	2.16	2.16	2.42	2.67	
平均	1.99	1.96	2.19	2.47	

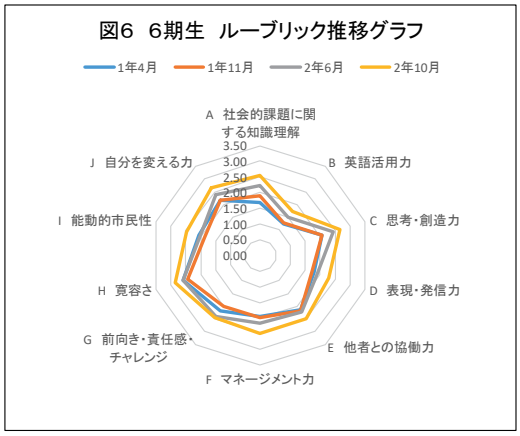
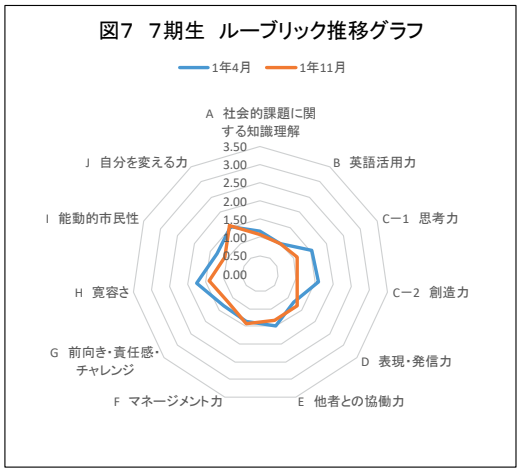
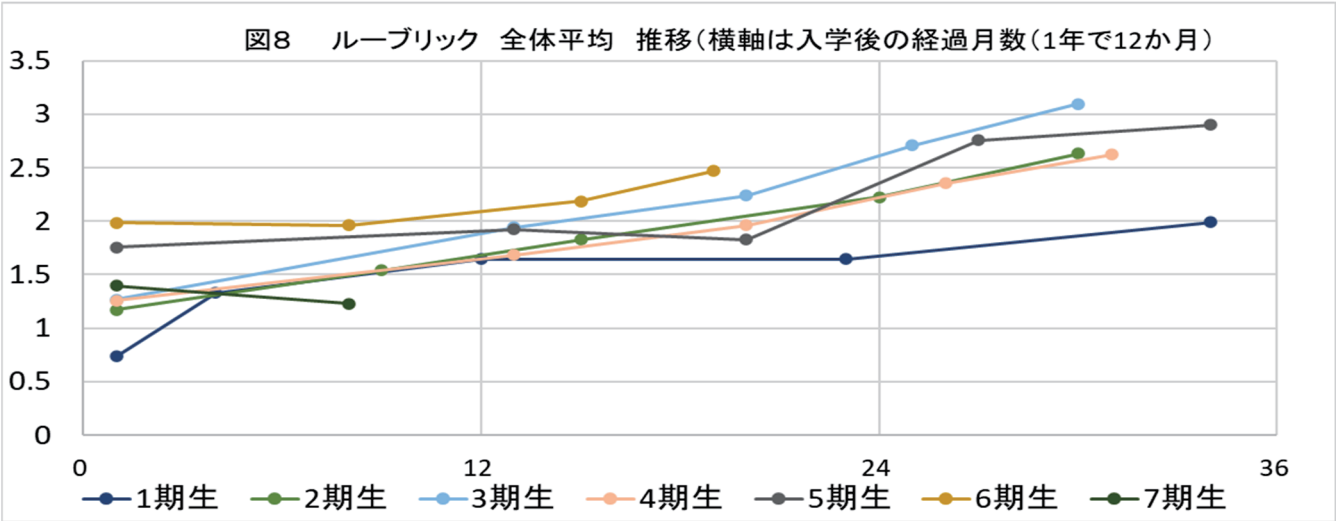


表7　7期生ルーブリック推移表	1年4月	1年11月			推移グラフ
A　社会的課題に関する知識理解	1.16	1.08			
B　英語活用力	1.00	1.00			
C－1　思考力	1.55	1.09			
C－2　創造力	1.62	1.01			
D　表現・発信力	1.21	1.33			
E　他者との協働力	1.50	1.33			
F　マネージメント力	1.37	1.42			
G　前向き・責任感・チャレンジ	1.33	1.17			
H　寛容さ	1.77	1.42			
I　能動的市民性	1.30	1.08			
J　自分を変える力	1.52	1.58			
平均	1.39	1.23			





（３）５期生（令和３年度３年生）の評価

５期生（3 年次）に対しては、本校入学から卒業までに計５回のルーブリック調査を実施した。なお、本校のルーブリックについては本報告書の関係資料に掲載した。

調査では、生徒自身が評価の観点 10 項目それぞれに対して自己評価を行った。各項目について最低は 0、最高は５である。最高レベルは本校の開学の精神である「変革者たれ」を実現できるレベルとして設定している。自己評価後、生徒同士のピアレビューや教員と生徒による１対１の面談（ルーブリック面談）による修正を経て、自身が現在どのレベルにいるかを評価した。また１期生からの評価条件を統一するため、ここでまとめたものは自己評価後、ピアレビュー、面談前のデータを用いる。

5 期生のデータを（２）表５、図５に示す（表１～4、図１～４は１～4 期生のデータである）。まず、1 年４月の時点での値の平均が 1.76 とこれまでの 1～4 期生よりも高い状態からのスタートとなり、4 期生の 2 年４月の時点の値（1.68）とほぼ同様な値を示した。その後、平均が 2 年４月には 1.92 と上がったものの、2 年 11 月には 1.83 と下がった。

5 期生では 1 年次より探究のプロセスを重視し、これまでの 1～4 期生の探究で多く見られた「自分の考えを印象で語る」ことをしないように客観的なデータに基づく自分の主張の構築やメディアリテラシーを高めるために、批判的に物事を判断するトレーニングを多く取り入れてきた。また、メンタルマップやフューチャーマッピングなどの手法を取り入れ、探究のゴールまでのプロセスを見通した探究指導に取り組んできた。このような成果は 2 年次後半から 3 年次前半の時期の数値の伸長に大きくされている。特に、2 年次後半から３年次にかけてはコロナの影響で再び学校が休校になって時期をふくんでおり、思うように探究が進まない中でも試行錯誤しながら探究を進めていく中で、これまでとは違った学びの形を５期生が自ら切り開いていったというところか見ることができる。オンラインでの交流会で探究を進めた生徒やコロナの小康状態を見計らって積極的に校外に出て探究を進めた生徒など活動は様々であるが、予測不可能な時代（VUCA）を生きるこれからの時代の学びを体現した活躍だっだと考えている。

なお、例年よりも 3 年次最後のルーブリック取得時期が他の学年よりも遅い時期（1 月の論文作成終了時）だったこともあり、自分のこれまで取り組んできた探究の総まとめを論文に反映し、俯瞰して自己評価ができたことが高評価につながっていると思われる。

（４）６期生（令和３年度２年生）の評価

６期生はこれまで４回ルーブリック評価を行っている。値を表６、グラフを図７に示した。６期生の推移は５期生の推移と非常によく似ている。最初の値は以前の１～４期生と異なり、高い値から始まっている。全体の平均値は 1.99 と、1～7 期のなかでは最も高い値となっている。特に高いのは H 寛容さであり、これは１～6 期生で共通している。次に高い値は G 前向き、責任感・チャレンジであり、６期生の学校生活に対する意欲や期待が非常に高かったことが伺える。G が 2 番目に高かったことはこれまでの１～５期生とは少し異なる。

2 年次は 1～5 期生とルーブリックの取得時期が異なっている。従来は 2 回目のルーブリック取得は 2 年４月の未来創造探究スタート時であったが、5 期生は 1 年 11 月に演劇プログラムが終了し、２年次の未来創造探究の開始時期を前倒しするために、1 年の 12～3 月は未来創造探究へとつながるプレ探究のプログラムを行った。そのため 3～5 期生の 3 回目ルーブリック取得データと 6 期生の 4 回目ルーブリック取得時期を合わせて比較できるようになっている。この比較によると、2 年 11 月の同時期の比較では６期生の数値は全項目で 3～5 期生のデータを上回っており、特に G　前向き・責任感・チャレンジの項目が高い。探究を前倒ししてスタートさせ、自分の取り組むべきことに積極的に取り組んでいるところや海外研修・マイプロへの希望率が高いことやふくしま学（楽）会への外部イベントへの参加率が高いなどにつながっている。

（５）７期生（令和３年度１年生）の評価

７期生はこれまで２回ルーブリック評価を行っている。値を表７、グラフを図７に示した。７期生の推移は 1～４期生と似ている。1 年次４月のデータでは 5～6 期生の 4 月のデータよりも全体的に低いが、1～4 期生と比べて A～J の項目のばらつきが少ないことがあげられる。また、1 年 11 月のデータでは D 表現力・発信力や J 自分を変える力が伸びたものの、多くの項目で数値を下げた。特に、C-1 思考力と C-2 創造力の落ち込みが大きい。高校生活が始まった直後に行った数値と演劇や地域の課題発見プログラムを終えた後のルーブリック取得であったことも数値には影響している。1 学年担任団及び地域創造と人間生活の担当者との話から、11 月のデータについては、「4 月当時よりもより客観的にルーブリックの指標を理解し、演劇プログラムを通じて内省的に自分を客観視できるようになってきている。見かけのデータとしては

数値は下がっているが、11 月の評価の方がむしろ適正な評価であり、次年度以降の探究学習に向けて大きく期待できる。」というコメントがあり、今後も推移を見守っていきたい。

（６）１期生から７期生の平均値の推移

１～７期生のルーブリックの推移について、値の全体平均値の推移グラフを（２）図８に示す。１～４期生までは１年次から３年次まで順調に値が高まっているのに対し、５～６期生は、1 年次最初から値が高く、その状態をほぼ維持したまま推移している。

これまでのところ、３期生が３年最後の値としては最も高くなっている。昨年度、４期生（今年度卒業生）は 2 期生とほぼ同じような推移を示した。3 期生は特に３年次の最後の半年で大きな伸びを見せており、４期生でも同様な状況になることを期待したが、コロナ禍の影響もありそれほど高まらなかった。3 年間のグラフの傾きに注目すると、5 期生の第３回（2 年 11 月）から第４回（3 年６月）の急上昇が見られる。

5 期生の 3 年ゼロ学期はコロナによる 3 回目の緊急事態宣言が出ていた時期で、探究が当初の計画通りに進まなかったことも多いと思うが、探究に必要な力が定着してきた時期がこの頃だったと考える。

また、６年間のデータより、当初、最終的に高くなるのは A 社会課題に関する知識・理解、H 寛容さ、G 前向き・責任感・チャレンジあたりであったものが、最近は H 寛容さ、J 自分を変える力、C 思考・創造力あたりに変化しつつある。H 寛容さが高いのは本校の 1 期生からの特徴である。寛容性は本校の設立経緯を踏まえて本校で独自に設定した項目であるが、この力が探究活動をはじめとする学校教育全体で育成されていることは注目したい。また J や C はこれからの教育で必要とされる要素であり、これらが高いことも、本校の教育が好ましい方向に進んでいることを示していると思われる。

５．２　ルーブリック評価の定量的分析（アクセンチュア株式会社）

本校において独自に設定したルーブリック評価に基づき、定期的に測定してきた。その結果を基に、アクセンチュア株式会社様と一般社団法人次世代教育・産官学民連携機構（CIE）様の視点から生徒の成長、変容を客観的に確認することに取り組んだ。その結果、全体的に成長している一方で、指標ごとの伸びの大きさに違いが確認できた。主に社会的課題に関する知識・理解、思考・創造力、前向き・責任感・チャレンジ、能動的市民性といった要素が成長しており、未来創造探究等の活動を通じた影響が現れていると考えられる。実際の活動内容と分析結果を比較することで、次年度以降のカリキュラム検討に活用することができる。

（1）はじめに

本校では、指導の重点の設定、授業の展開、学習評価、学校評価等をルーブリックと関連づけながら展開することを目指している。ルーブリックの指標、レベル設定は全教員で議論を重ね、自分達の言葉で定義した。4 カテゴリ（「知識」、「技能」、「人格」、「自らを振り返り変えていく力」）、10 指標を定義し、それぞれ５段階のレベル（1－5）を絶対評価になるよう設定した。

■知識：A 社会的課題に関する知識・理解、B 英語活用力

■技能（スキル・コンピテンシー）：C 思考・創造力（7 期生からはC－1 思考力、C－2 創造力に分離）、D 表現・発信力、E 他者との協働力、F マネージメント力

■人格（キャラクター・センス）：G 前向き・責任感・チャレンジ、H 寛容さ、I 能動的市民性

■自らを振り返り変えていく力：J 自分を変える力

＜データ取得タイミング＞

年度／月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
令和1年度	5期生		①										
	6期生												
	7期生												
令和2年度	5期生	②							③				
	6期生	①							②				
	7期生												
令和3年度	5期生			④							⑤		
	6期生			③				④					
	7期生	①							②				

測定においては、自己評価に加え、生徒間ピアレビューを実施することで評価の客観性をもたせている。

データ分析はプロボノとして関わってアクセンチュア株式会社に依頼し、次項以降のデータ分析、示唆出しを行った。（OECD 東北スクール、地方創生イノベーションスクール 2030 東北クラスターにおいても福島大学と協働でルーブリック評価をしており、その知見も活用して実施していった。）

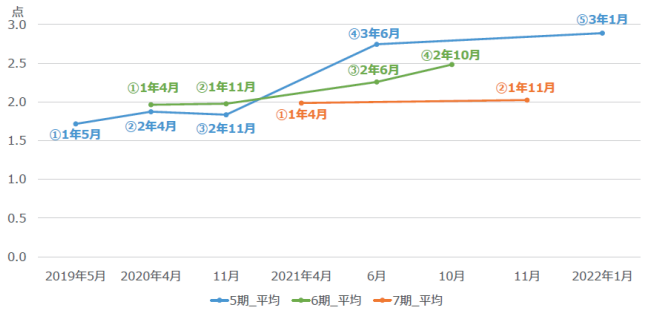
（2）データ分析の概要

今回の分析対象は、全ての測定時に回答している学生のみとした（5 期生：計 99 名。アカデミック 36 名、スペシャリスト 32 名、トップアスリート 31 名。6 期生：計 125 名。アカデミック 45 名、スペシャリスト 35 名、トップアスリート 45 名。7 期生：計 96 名）。入学時から卒業までの推移を見るとともに、5 期生と 6 期生、7 期生を比較しながら、指標ごとの傾向、生徒の系列ごとの傾向、海外研修有無別の傾向などの分析を進めていった。

１）5 期生・6 期生・7 期生の平均値の推移

5 期生は 2 年後半までの到達度は低かったものの、3 年への進級にかけて大きく点数を伸ばした。6 期生では点数の伸びは 2 年への進級にかけて（②→③）確認できた。一方で 7 期生は、 6 期生の同時期と類似した点数の推移であった。（図１）

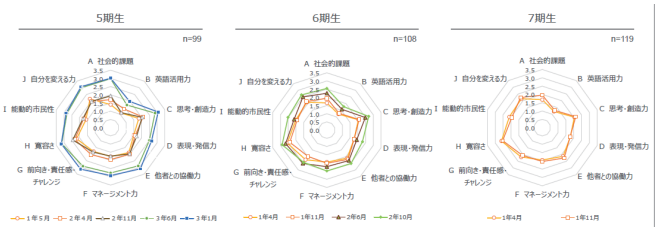
図１



２）全体ルーブリック評価の学年別平均比較

左より 5 期生、6 期生、7 期生の順にグラフが示されている。全ての学年で A. 社会的課題に関する知識・理解の点数の伸びが最も大きい。その一方で、B. 英語活用力については全ての学年でどの測定時点においても他の項目と比べて最も低い点数で推移している。この傾向は１～７期生のすべての年次で見られる傾向である。（図２）

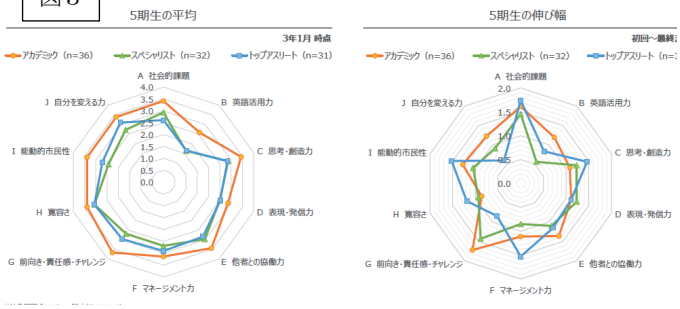
図２



（3）生徒の系列ごとの比較

左のグラフが５期生の平均、右のグラフは５期生の伸び幅を示している。アカデミック系列が他の系列と比べ全ての項目で点数が高かった、一方、伸び幅については、能力をのばした項目が系列に異なる傾向が見られた。アカデミック系列では G. 前向き・責任感・チャレンジと E. 他社との協働力の項目、スペシャリストはＡ社会的課題に関する知識・理解と G. 前向き・責任感・チャレンジの項目、トップアスリートは I. 能動的市民性と F. マネージメント力の項目の伸び幅が高かった。（図３）

図３



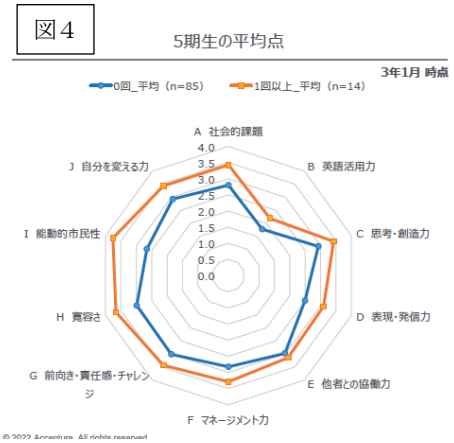
また、すべての系列で３年次以降の点数の伸びが顕著であった。一方トップアスリート系列については初回測定時①から J. 自分を変える力が他の項目に比して高いレベルにあり、その後も能力を伸ばしていった。

（4）海外研修参加有無の比較

海外研修は授業に加えて重要視される活動の一つにがある。5 期生の対象とする海外研修は、ドイツ（1 年次）、アメリカ（2 年次冬）であり、どれか一つでも参加した生徒は 14 名であった。ただし、コロナ禍の影響でドイツ研修は現地に行くことができたが、アメリカは国内代替プログラムとなった。そのため、今回の分析は参考として行った。

左側は５期生の平均点、右側は伸び幅を示している。オレンジは海外研修参加生徒を示しており、全ての項目で海外研修に参加していない生徒の数値を上回った。（ただし、海外研修への参加はランダムに決まったものではないため、研修参加と成長度合いの因果関係は必ずしもあると言えるわけではないことは注意が必要である。）

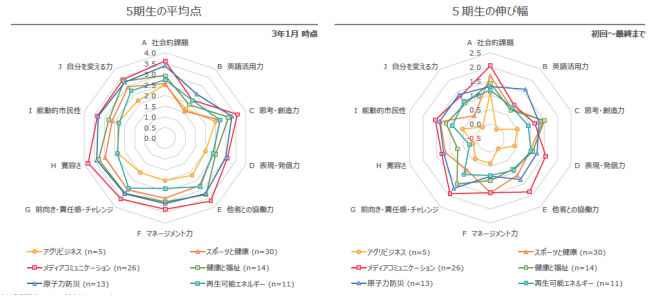
図４



海外に参加した生徒の中で特に大きく伸長が見られた項目は、I. 能動的市民性と J. 自分を変える力の項目である。A の項目は海外研修参加者の初期値がもともと高く、得られた知識を踏まえて行動に生かしたり、よりグローバルな視点で考えることができるなどの観点からこの項目が伸びたと推察する。

（5）所属ゼミごとの比較

7 年間の探究活動の蓄積の中で、所属ゼミごとに伸長する項目が異なっているのではないかという仮説を立て、今年度は新たに所属ゼミごとの平均点の比較(左)と伸び幅（右）の分析を依頼した。



平均点については、どのゼミでもほぼ相似形を示しているが、メディア・コミュニケーションゼミが B. 英語活用力を除くすべての項目で最も高いレベルを示す一方、伸び幅については、原子力防災ゼミは B の項目の伸び幅が他のゼミと比して著しく高い。

（6）今後の展望

今回の分析では、ルーブリックの定点観測のデータから、全体の成長の傾向、及び系列や海外研修の有無といった活動内容ごとの比較検討を行った。今後、他学年のルーブリックの観測時期が揃えられ、さらに活動内容がより細かく記録されることで、成長の傾向を比較分析することができるようになれば、より効果的にカリキュラム検討への示唆が得られるようになると考えられる。

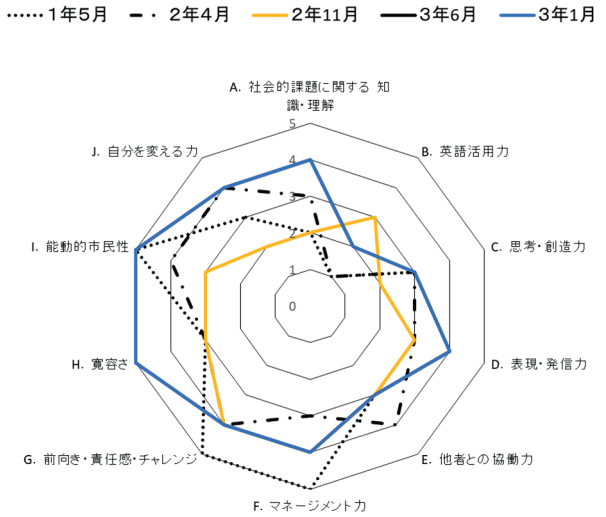
また、ルーブリック評価のデータを個人別に整理すること（例、生徒カルテの作成）により、生徒と教員の面談や、アクティブラーニングを実施する際の目標設定に活用することができる。到達レベルを可視化し、データを用いて面談を進めることにより、生徒のメタ認知を伸ばすことにもつながる。加えて、分析の元データの客観性、信頼性の担保という課題に対しても、教員による確認が入り、本人との面談を通じてレベルの修正が行われうることにより、改善され、更に分析の精度が向上するものと考えられる。

５．３　５期生の個別評価

５期生のうち、未来創造探究の各ゼミ 1～２人ずつ生徒をピックアップし、本人の活動の様子とルーブリック評価の推移について分析した。

○生徒 R･A（原子力防災探究ゼミ）

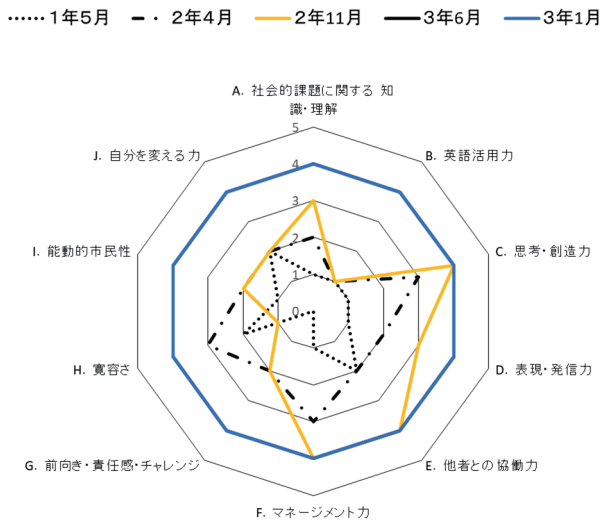
【平均値】平均値 3.40（1 年 4 月）→3.80（3 年 1 月）



本生徒は、双葉郡出身の生徒であり、アカデミック系列に所属している。入学当初から双葉郡の復興に対して興味関心が高く、問題意識を持って生活しており、積極的に行動していた。しかし、１年次後半より、具体的に自分は何をすべきかに行き詰まりを見せ始めた。校内の海外研修や校外の様々なイベントにも積極的に参加し、視野を広めようと努力した。１年次にドイツ研修に参加しフライブルクの町づくりに感銘を受け、地元の強みを活かす町づくりという自分なりのテーマを持つことができた。２年次４月からの探究では、漠然としたテーマは持ちつつも、やはり具体的な行動に移すことができず、３年生の前半までほとんど探究を進めることができなかった。そのことがこのルーブリックの自己評価に反映されている。３年次の夏休み前から、浪江町の商工会とつながることで､探究テーマに対するプロジェクトを設定し、地域と協働で企画立案から事前準備、そしてイベント開催中のマネジメント、その後の振り返りを通して、自己肯定感も高まり３年１月の自己評価につながった。浪江町商工会との関わり方が、比較的対等な立場で、意見を反映させることができたことが、全体的な自己評価の向上に反映していると思われる。

○生徒 Y･A（原子力防災探究ゼミ）

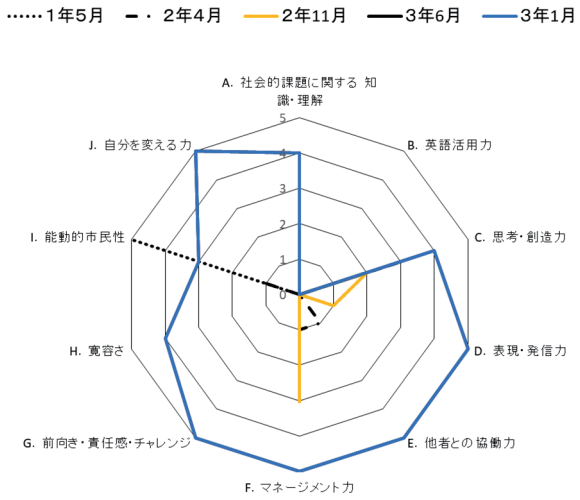
【平均値】1.20（1 年 4 月）→4.00（3 年 1 月）



本生徒は、双葉郡外出身の寮で生活している。アカデミック系列に所属しているが、陸上に力を入れ、東北大会等でも活躍する生徒である。１年次から２年次の前半にかけて、探究にもあまり力を入れることなく、周りの生徒が行う調査研究などにもそれほど積極的に関わらない生徒であった。しかし、原子力防災班全体でのフィールドワーク等を通して徐々に双葉郡に対する知識を増やし、問題意識を持つようになり、探究に対して積極的に発言するようになってきた。そのことは、２年４月から徐々にルーブリックの自己評価に現れてきている。第１志望とする心理学系大学の総合選抜型の入試において、自分たちの班で行ってきた探究をアピールすることをきっかけに、論文作成において心理学を組み合わせ仮説を立てるなど非常に積極的に探究に取り組むようになった。それに伴い、班のメンバーだけでなく、多くの生徒や先生からの評価も高くなり、自己肯定感も高くなり、ルーブリックの自己評価の向上につながってきたと思われる。

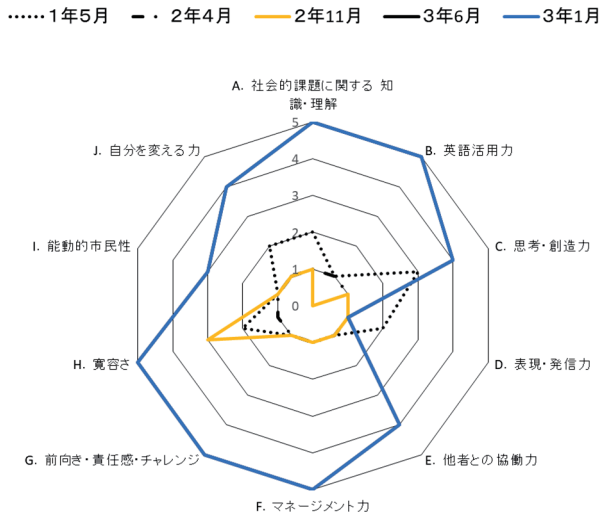
○生徒 M.S（メディア・コミュニケーション探究ゼミ）

【平均値】1.10（1 年 5 月）→4.00（3 年 1 月）



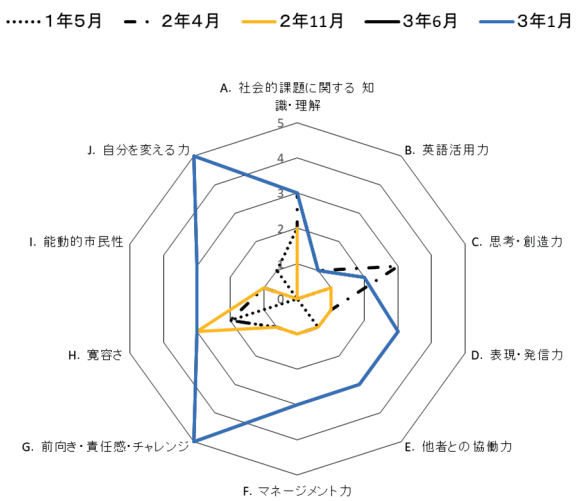
S は双葉郡大熊町にルーツを持つ男子生徒である。未来創造探究の当初から、ふるさとの大熊町に関する活動を行おうと考え、友人とともに大熊町出身の生徒の座談会や、役場職員と協力したイベントの企画に携わった。「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」が０から５に、「表現・発信力」が１から５へ飛躍的に伸びている。探究活動の中で異なる世代との交流を行ったことが背景にあると考察する。

○生徒 Y･M（メディア・コミュニケーション探究ゼミ）
【平均値】1.60（1 年 4 月）→4.10（3 年 1 月）



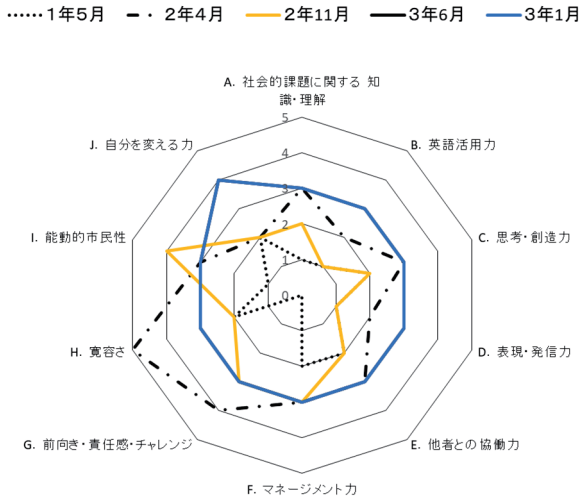
本生徒は双葉郡楢葉町出身かつ現在も楢葉町から通学し、町の Youtube での CM に出演、2021 年の東日本大震災追悼復興祈念式では「誓いの言葉」を述べるなど、発信力が期待されていた女子生徒である。探究は人びとの諸問題へ関心を高めることを目標とする「「他人事」を「知り合い事」へ」をテーマに活動を行った。ルーブリックでは「マネージメント力」「前向き・責任感・チャレンジ」が１から５へと飛躍的に伸びた。特筆すべきは本校生徒の平均値が低い「英語活用力」も１から５へと伸びており、探究活動の論文も英語で執筆したことからも自信がうかがえる。本校のニューヨーク研修などに積極的に参加したことなどが背景にあると思われる。

○生徒 S.S（再生可能エネルギー探究ゼミ）
【平均値】0.90（1 年 4 月）→3.10（3 年 1 月）



本生徒は広野町出身の男子生徒であり、地元の農業に貢献したいという思いから、スペシャリスト農業系列を選択した。高校２年次より、授業や探究活動、農業クラブの諸活動を通して、自分の興味関心の高い分野において、積極的にチャレンジをしてきた。その成果もあり、「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」の項目において、１から５へ変化してきた。様々な挑戦を通して、自己肯定感が高まり、さらに新たな課題に挑戦してみたいという気持ちのサイクルが身についたようだ。

○生徒 S.S（再生可能エネルギー探究ゼミ）
【平均値】1.40（1 年 4 月）→3.10（3 年 1 月）

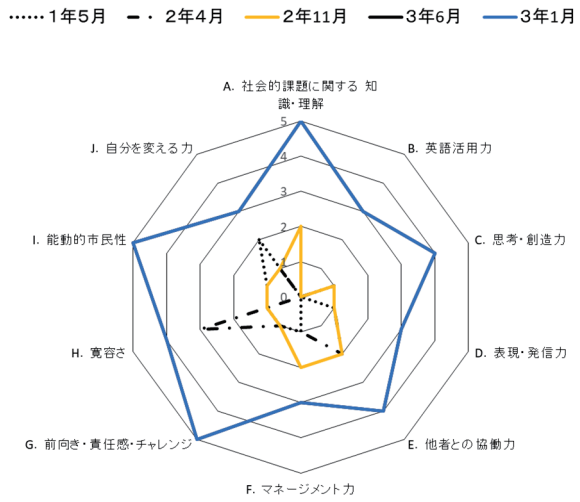


本生徒は広野町出身の男子生徒であり、情報系の大学進学を希望しており、アカデミック理系を選択している。当初は人と話すことを苦手としていたが、１年次のベラルーシ研修や２年次からの探究活動のテーマでもあるトリチウム汚染水処理問題を通して、コミュニケーションを取ることの難しさを痛感し、そこから徐々に姿勢が変化していった。周りへの感謝の気持ちが芽生え、「表現・発信力」「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレン

ジ」等の項目において、全体的に数値が上昇した。

○生徒F.K（アグリ・ビジネス探究ゼミ）

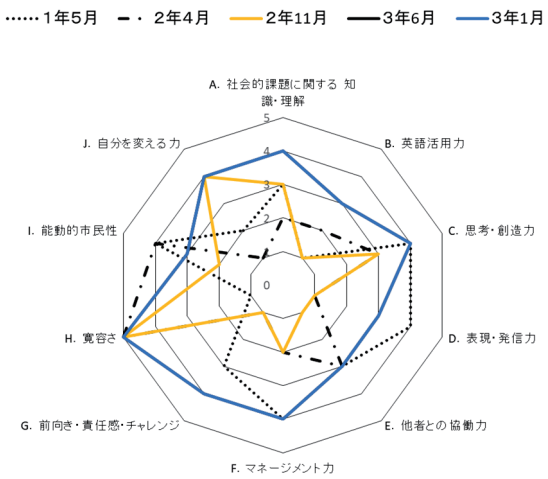
【平均値】0.80（1年4月）→3.90（3年1月）



本生徒は双葉郡には縁のない女子生徒である。未来創造探究の当初から、スペシャリスト農業で菓子作りを授業で学んだことから、お菓子を通して地域コミュニティーの復活を志し、大熊町新特産品「イチゴ」で双葉郡でも人口が最も少ない大熊町、原発の町としてのレッテルが貼られている大熊町に交流を生み出そうと活動した。「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」が０から５に、「表現・発信力」が１から５へ飛躍的に伸びている。探究活動で異なる世代との交流や発表会で高い評価をいただいたことも背景にあると考察する。

○生徒N.S（アグリ・ビジネス探究ゼミ）

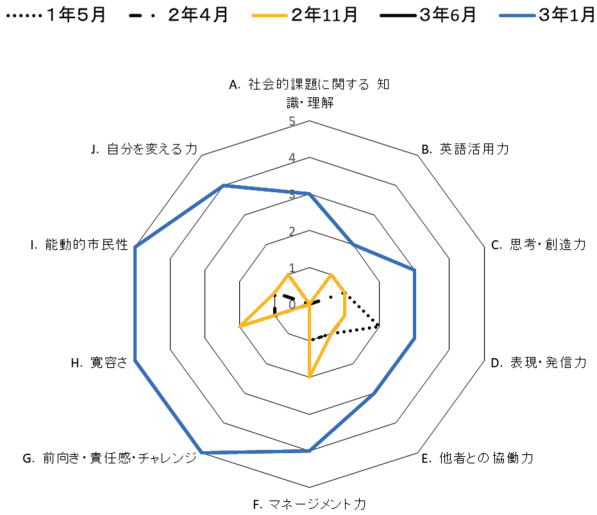
【平均値】2.90（1年4月）→3.70（3年1月）



本生徒は原町出身の女子生徒である。２年次の途中からゼミ移動をしてきた生徒の一人である。　福島（広野）を発信していくために、広野のバナナを使ってバナナ×ギョウザを作り、県内＋県外にイベントへの出店・出品を計画した。広野町内だけでの販売でおわったが「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」が０から５に、「表現・発信力」が１から５へ飛躍的に伸びている。探究活動の中で、異なる世代との交流や、チーム内の意見を整理し、実現に向けた誠実な取り組みは評価に値する。

○生徒K.E（スポーツと健康探究ゼミ）

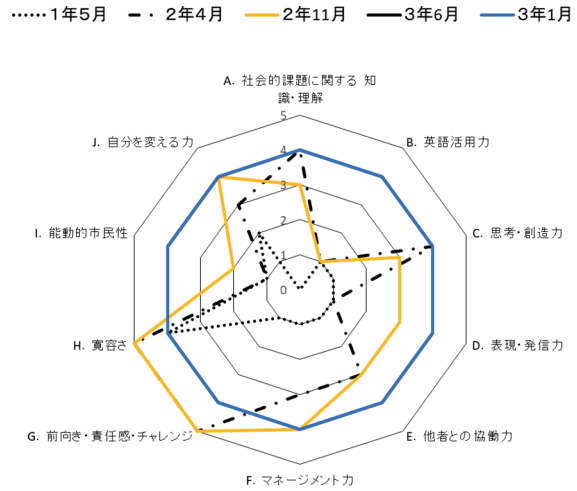
【平均値】0.90（1年4月）→3.70（3年1月）



最初のテーマから試行錯誤を繰り返し、tik　tok を利用した高齢者向けのダンスの配信というテーまで実践を行った。コロナ禍で様々な制約がある中で３回のプロジェクトを実施できたことが、マネージメント力が１→４まで上昇したことに表れている。プロジェクトごとに課題を明確にし、改善して次のプロジェクトに臨めることができていた。

○生徒M.A（スポーツと健康探究ゼミ）

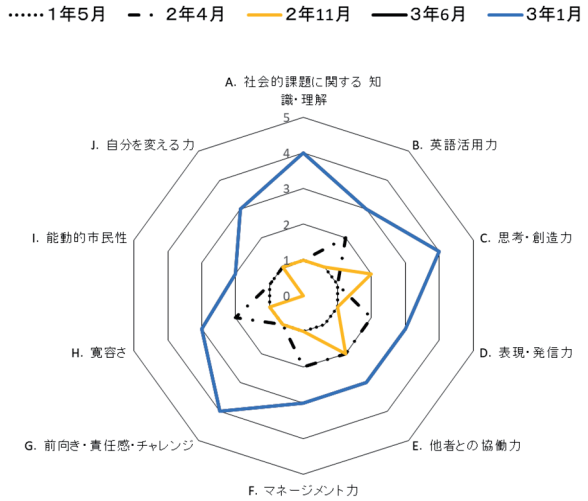
【平均値】1.30（1年4月）→4.00（3年1月）



最初に設定したテーマがから何度も話し合いを繰り返し、自分たちで動画を作成して発信することで世界と繋がることを目指したプロジェクトを実践した。3 本の動画を作成していく中で、世界に発信するため、英語の字幕を付けて動画を配信した。英語活用能力が１→４まで上がっており、成果が見られた。

○生徒Ｍ・Ｓ（健康と福祉探究ゼミ）

【平均値】1.00（1 年 5 月）→3.20（3 年 1 月）



本生徒は「高齢者の生きがい」をテーマとして探究活動を行ってきた。本校へ入学する以前から高齢者福祉に興味があり、介護に携わる仕事に就きたいと考えている生徒である。２年次では「ヘルプマーク」をテーマにすることを検討していたが、自らの興味・関心と進路の希望を踏まえて「高齢者に生きがいを！！」というテーマへ変更することとなった。テーマ変更後はコロナ禍において高齢者と安全に交流し、生きがいをどのように持ってもらうかを真剣に考え、高齢者との交換日記を積極的に実践した。この実践における思考や行動の変容は３年次１月のルーブリックに表れている。特にA.「社会的課題に関する　知識・理解」、C.「思考・創造力」、G.「前向き・責任感・チャレンジ」では評価が「４」に高まった。

５．４　３年間を通した各取組に関する評価

本校で探究に関連する科目（産業社会と人間、総合的な探究の時間（未来創造探究））や海外研修について、生徒がどのように捉えてきたのか、5 期生に対してアンケートを行った。

意識調査

以下の表に示す内容について探究の授業についての意識調査を行った（実施時期：令和４年２月、回答生徒数：49 人、任意）。Q1～Q3 は地域との関わり、Q4～Q6 は探究と教科の関わり、Q7～Q11 は自分自身と社会との関わりについてである。

表　調査項目と結果（数値は回答の割合）
（４：とてもそう思う　３：そう思う
２：あまり思わない　１：全くそう思わない）

	調査項目	4	3	2	1
Q１	探究授業を通じて、地域に対する興味関心が高まった。	49.0	51.0	0.0	0.0
Q2	探究授業を通じて、自分と地域とのつながりが増えた。	38.8	46.9	14.3	0.0
Q3	探究授業を通じて、地域のことが好きになった。	32.7	57.1	8.2	2.0
Q4	探究授業を通じて学んだことと、教科学習で学んだこととのつながりを感じることがある。	24.5	51.0	24.5	0.0
Q5	探究授業に、教科学習で学んだことを活かせている。	22.4	57.1	16.3	4.1
Q6	探究授業を通じて、教科学習の必要性を感じる。	38.8	46.9	12.2	2.0
Q7	探究授業を通じて、世界や日本で起こっている課題を自分の身近に感じるようになった。	46.9	42.9	10.2	0.0
Q8	探究授業を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった。	36.7	53.1	10.2	0.0
Q9	探究授業を通じて、自分の考えや意見が深まった。	49.0	49.0	2.0	0.0
Q10	探究授業を通じて、自分のことが好きになった。	16.3	34.7	38.8	8.2
Q11	探究授業を通じて、自分が動けば社会は変えられると思った。	18.4	51.0	24.5	6.1

ほぼ全ての項目について肯定的意見（３，４）を半数以上の生徒が回答している。一昨年から同様な調査を行っているが昨年に引き続き肯定的に捉えている生徒が多いことも特徴であり、探究の授業が生徒にとって学びの土壌になっていることがわかる。地域との関わりについては、今年度もコロナ禍により接触が制限される環境であったものの、9 割の生徒が肯定しており、本校の探究活動が地域と密接に関連していることがわかる。Q6 のように探究と教科の関わりについても肯定的意見は８割以上となり、今年度はこの項目が一番伸長した。（昨年 77.1→今年 85.7)）教員が意識して取り組んでいる「探究と教科学習との往還」についても有効に活用されていることが伺える。また社会と関わりについても肯定的意見の割合は高く、Q9「探究授業を通じて自分の意見が深まった」については 98%の生徒が肯定的に捉えている。Q10「探究授業を通じて自分のことが好きになった」という項目については他と比較して肯定的意見が少ないが、それでもほぼ半数の生徒が肯定的に捉えており、自分のことを見つめる良い機会になっていると思われる。

取組別評価

1～3 年の間に実施してきた主な取組を示し、その中で印象に残った取組、力がついた取組を調査した。結果を下表に示す（実施時期：令和４年２月、回答生徒数：49 人）。

表　印象に残った取組、力がついた取組（数値は割合）

		印象に残った取組	力がついた取組
A	1年次　マインドマップ講座	31%	10%
B	1年次 フューチャーマッピング	6%	8%
C	1年次 演劇（バスツアー・FW）	47%	29%
D	2年次 探究オリエンテーション	6%	12%
E	2年次 ゼミごとに分かれての活動	33%	33%
F	2年次 探究講座（調べ方講座）	6%	10%
G	2年次 ポスター作成講座	20%	18%
H	2年次 理科×福島学	10%	8%
I	2年次 社会×福島学	6%	6%
J	2年次 ゼミ内発表会	12%	18%
K	2年次 プレ発表会	31%	20%
L	2年次 4期生の未来創造探究発表会	22%	24%
M	3年次 未来創造探究発表会	41%	55%
N	その他	6%	4%

回答については複数回答も可としてアンケートを行っており、平均すると一人あたり 2.6 個程度（昨年平均 2.5 個）回答している。印象に残った取組と力がついた取組で数値は似通っている。最も印象に残り、また力が付いた取組は「発表会」であり、自分が発表する経験により生徒が成長している様子が伺える。生徒にとって、印象に残った活動と力のついた活動にはある程度の相関関係が見られる。今後も、各年次で力がついた取り組みについては、ブラッシュアップをしながら継続していくことが必要だと思われる。

５．５　進路や在り方生き方への影響に関する評価

探究活動が卒業時の進路や在り方生き方にどのような影響を与えたのか調べるために、3 年次生徒にアンケートを行った。なお、このアンケートは平成 30 年度から始めており、今年度が４回目である。

実 施 日：令和４年２月

対象生徒：5 期生 3 年次生徒　103 人

内　　容：以下のアンケート項目に対して、1～4 の 4 観点で選択、さらに具体的事例などを記述で回答。

結　　果：

質問項目		4	3	2	1
Q１ 未来創造探究は、あなたの卒業後の具体的な進路選択に影響を及ぼしましたか？	5期生	25.2	41.7	25.2	7.8
	4期生	23.4	42.3	27.9	6.3
	3期生	18.6	31.9	34.5	15.0
Q２ 未来創造探究での活動を、入社試験や入学試験に活用しましたか？	5期生	25.2	32.0	22.3	24.3
	4期生	32.7	33.6	20.9	12.7
	3期生	24.8	34.5	22.1	18.6
Q３ 未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？	5期生	27.2	60.2	9.7	2.9
	4期生	31.3	57.1	10.7	0.9
	3期生	25.7	54.9	16.8	2.7
Q４ 未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？	5期生	28.2	59.2	9.7	2.9
	4期生	35.7	54.5	8.9	0.9
	3期生	38.9	47.8	10.6	2.7

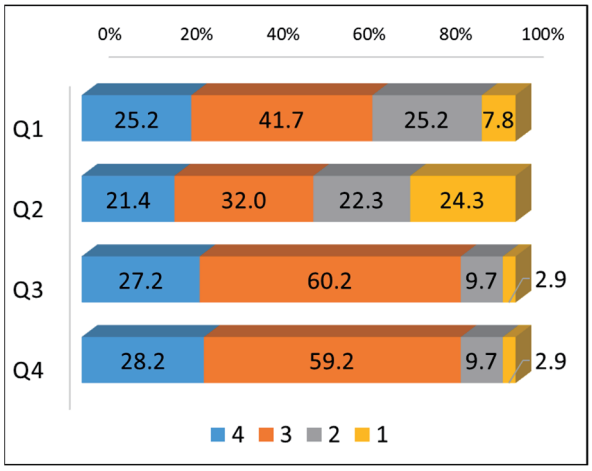
4　大きく影響した（繋がった・活用した）

3　ある程度影響した（繋がった・活用した）

2　あまり影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）

1　全く影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）

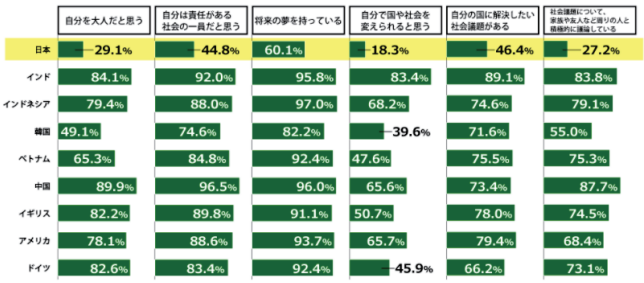
表中の値は割合（%）である。



Q1、Q2 については高卒時の進路選択、いわば短期的な進路について、探究活動の影響があったかどうかについてのアンケートである。Q1 では 67%の生徒が進路選択に影響があったと回答している。また Q2 においても６割近くの生徒が試験に探究活動を活用したと回答している。3 期生、4 期生と比較して、Q1 は肯定的評価は引き続き定着しており，Q2 では 5 期生は例年よりも一般受験にチャレンジしている生徒が多いため、数値は下がった。しかし、生徒の記述コメントからは探究が具体的に進路指導に結びついている例が多く見られた。「面接で探究のことを語った」や「受験のプレゼンで探究の発表が役に立った」というコメントが多く見られた。

Q3、Q4 は長期的な観点から、社会との関わりや自身の在り方生き方に関するアンケートである。いずれも抽象度の高い問いであるにも関わらず 8～9 割の生徒が肯定的に捉える結果となった。Q3 では「将来のことは何も考えていなかったが、社会に貢献していける人になりたいと思った。」「目の前の地域との関わりを深めることで、社会などの大きな見方ができるようになった。」といった記述が見られた。Q4 は価値観についての問いだが、これに対する肯定的意見が最も高くなっていた。「探究を通して、人と人とのつながりの大切さ、自分で問いを見つけ出し、どうすれば解決するか、アクションをおこしながら学びを深めていく大切さや復興とは小さなことから活動をしていくことなど、考えや価値観が一年次から大きく変わった。」といった記述が見られた。また、3 期生、4 期生と比較して、こちらの項目も 3，4 を回答する生徒が増えており、探究活動を行う効果が年々高まっていると言える。

高校生と社会の関わりを問う『18 歳意識調査「第 20 回 -社会や国に対する意識調査-」（日本財団、2019 年 11 月）（https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html 2022 年 3 月閲覧）と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴といえるであろう。



参考資料：18 歳意識調査「第 20 回 -社会や国に対する意識調査-」（日本財団）

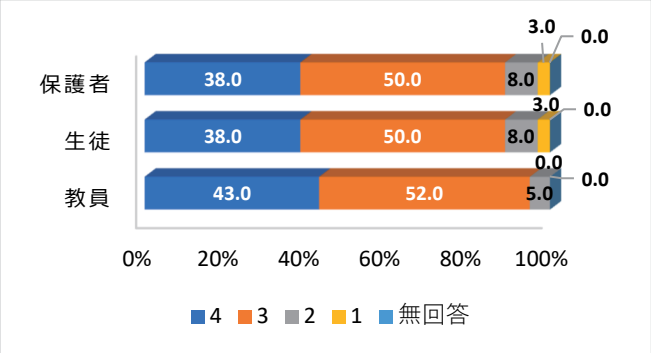
５．６　学校アンケートによる評価

本校の教育活動全般を評価するため、毎年１回、保護者、生徒、教員によるアンケートを行っている。このうち、本事業に関係するものについてピックアップした。

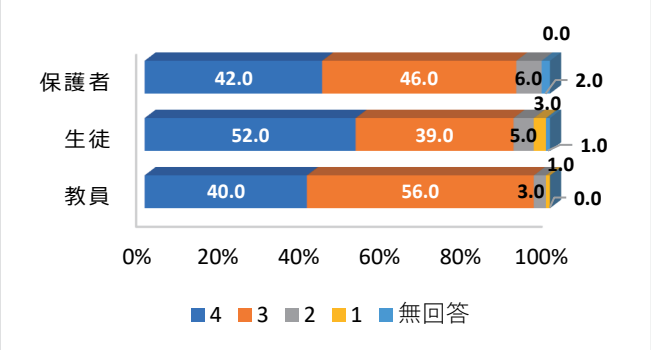
対　象：本校舎高校１～3 年の生徒、保護者、教員
回答数：保護者 218 名、生徒 268 人、教員 75 人
回　答：以下の４段階および無回答による回答
　　４：思う　３：ある程度思う
　　２：あまり思わない１：思わない

アンケート項目と結果：

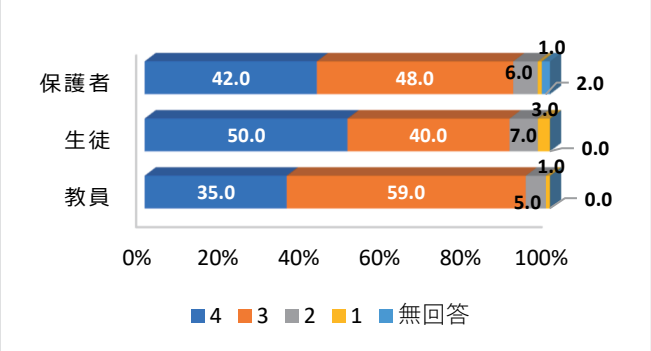
Q1　アクティブラーニングをはじめ、探究する力を育てる充実した授業が行われている



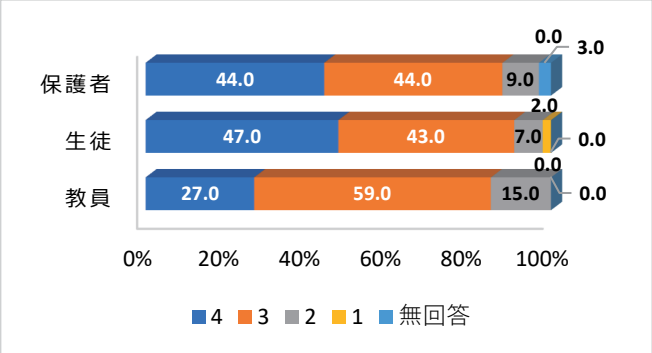
Q2　地域の課題に向き合う授業や活動が行われている。



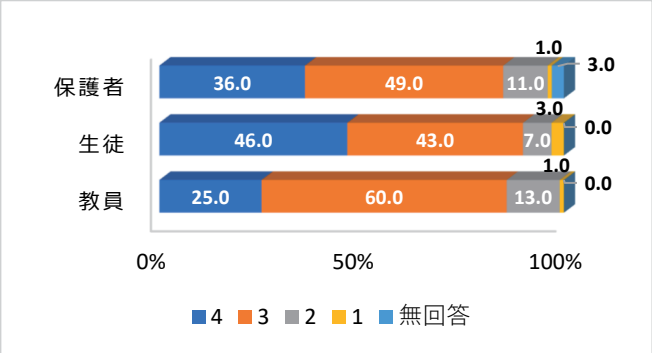
Q3　地域の課題に取り組むために、地域の方々や国内外の様々な組織と連携している。



Q4　地域の課題に向き合う授業や活動が、復興を目指す地域にとってプラスになっている。



Q5　地域だけでなくグローバルな視点（SDGｓなど）を持てるような取組が展開されている。



回答いただいた保護者、生徒、教員、いずれも肯定的意見が非常に高く、本事業の取組は高く評価されている。Q1 をみると、生徒・保護者ともにアクティブラーニングや探究する力を育てる授業がふたば未来学園の取り組みと認知されている様子がわかる。

Q2 については昨年度の生徒の肯定的評価（84％）から 91％に大きく上昇した。また教員についても昨年度の（87.8％）から 96％と上昇し、地域の課題解決に向けた授業を行う学校文化が根付いてきた。

Q3 は外部連携の状況についてのアンケートである。昨年度の生徒の肯定的評価（79.9％）から 90％と上昇し、コロナ禍にあっても協働的な学習を行うことができた。

Q４は探究活動の地域へ与える効果についてである。この質問についても肯定的意見が 8～9 割ほどであるが、教員の肯定的意見が３者のなかで一番低くなっていることは残念である。生徒が実践している内容は地域の復興にも寄与することも教員間で目線合わせをする必要がある。

Q5 はグローバルな視点についてである。これも全体としては肯定的意見が多いものの、教員の肯定的意見が低い。教員の肯定的評価自体は 75.7％から 85％へ上昇しているため、積極的に自校の取り組みを振り返る必要があると考えられる。

５．７　設定した目標の達成度

本事業で設定した目標と今年度の達成度について以下に示す。またそれぞれの項目について以下にまとめる。

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値						単位：なし
	本事業対象生徒：	2.63	3.10	2.62	2.90		3.5
	本事業対象生徒以外：						
	目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的に実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70％以上						単位：　％
	本事業対象生徒：	83.2	84	89	87.4		70
	本事業対象生徒以外：						
	目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もおり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合						単位：　％
	本事業対象生徒：		調査なし	67	88.5		70
	本事業対象生徒以外：						
	目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。						

２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数（3年次生）						単位：　件
		31	40	52	60		50
	目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の１年間を対象とする。						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数						単位：　件
		調査なし	調査なし	178	192		250
	目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。※ただしコロナ禍の状況で未確定な要素が大きい。						
c	（その他本構想における取組の具体的指標） 生徒の外部発表、コンテスト応募件数						単位：　件
		調査なし	35	42	44		45
	目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。						

３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数						単位：　件
		150	165	301	310		200
	目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。※ただし、コロナ禍の状況であるため、オンラインでの対応活動指標に含めることとする。						

1a　本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値

本校の開校以来、ルーブリックの最終調査における平均値は以下の表のように推移してきた（詳細は5.1参照）。

1期生 H29年度卒	2期生 H30年度卒	3期生 H31年度卒	4期生 R2年度卒	5期生 R3年度卒
1.99	2.63	3.10	2.62	2.90

1～3期生まで値が順調に伸びていたが、4期生は3期生よりも低下した。5期生はそこから2.90まで上昇した。本事業の最終年度となる令和4年度において「3.5」以上を目指しており、これを達成できるように引き続き取り組みたい。多くの生徒は年次が上がるにつれ評価が高くなり、探究活動も自走できるようになっていくが、一部、レベル0や1の評価のままの生徒もおり、そのような生徒について指導を手厚くする等、丁寧な伴走、指導を教員側で心掛けたい。その意味において、ルーブリックを「形成的評価」として活用したり、生徒と定期的に面談等を行ったりすることがより重要となる。

1b 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合

この項目については2期生からアンケートを行っており、今年度の調査で4回目となる（詳細は5.5参照）。ここでは以下の2つのアンケートの平均を指標としている。

Q①未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？

Q②未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？

今年度、肯定的意見の割合は、Q①では87.4%、Q②では87.4%であり、目標である70%を大きく上回る結果となった。この値は4回実施しているなかで昨年より微減だったが、ここ2年は上昇している。このことから本校の探究活動は自分たちの生き方在り方を深く考える非常に良い機会となっていることがわかる。

1c　本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合

例年実施している学校評価アンケートのなかに、今年度より本事業に関連する項目を追加した（詳細は5.6参照）。5つのアンケート項目のうち、肯定的意見（3および4の回答）について各アンケートの平均をとり、この値で評価することとした。結果としては72.7%となり、昨年達成できなかった70%の目標を超えた。5項目のアンケートのうち、授業についての項目で昨年は保護者の未回答が多かったが（35%）、今年度は5%とおおきくさがり、本校での授業の取り組みが、保護者にもご理解いただけるようになったと考えている。

2a　地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数

本校の課題探究は、地域に関わるテーマとすることを基本としている。ここではそのうち地域の方と連携、協働しながら進めるテーマ数を取り上げることとした。今年度、3年次の課題探究のプロジェクトのうち、これに該当するものは60件あり、目標としている50件以上を達成することができた。高校2年次や中学生の探究プロジェクトを含めると常時200以上のプロジェクトが動いており、学校全体としても探究学習が活性化している。

2b 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数

本校への来校者数は昨年度まで調査しておらず、今年度よりカウントを開始した。今年度もコロナ禍により来校者がいない時期もあったが、最終的に192名の方に来校いただいた。今年度は直接来校した方（実質3か月の間）が集中し、オンラインで開催した生徒探究発表会では99名の方が外部から参加された。本校の探究学習が県内外から注目されていることから、本校の教育活動が今後も積極的に外部の視察を受け入れ、本校の教育活動の他への普及に寄与したい。

2c 生徒の外部発表、コンテスト応募件数

今年度の具体的な取組を以下に示す。件数は最終的に51件となり、今年度の目標である45件を上回ることができた。今年度の成果としては、

- Glocal High School Meetings 2022（1月、本事業（グローカル型）に指定された高校による探究活動コンテスト、本校から日本語部門1件、英語部門1件発表、日本語部門で金賞（生徒間投票特別賞）、英語発表部門で金賞（探究成果発表委員会特別賞）を受賞した。
- 第21回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会（1月、本校から2件発表）
- マイプロジェクトアワード福島summit（1月、福島県内高校生対象の発表会、本校から10件応募、このうち1件が福島県代表として全国summitへ進出）
- マイプロジェクトアワード全国summit（3月、福島県

代表として1発表）

・第8回ふくしま学（楽）会（7月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から２件発表。またパネリストとして生徒１名が登壇。）

・第9回ふくしま学（楽）会（１月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から３件発表。広島研修で学んだ生徒たちを中心に発表を行った。

・ふたばアワード（11月、1～3年による学年横断型の地域課題探究発表会、18発表）

・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト（10月、福島県内高校生対象の発表会、本校から４件応募、優秀賞2本、入選、福島大AC賞受賞）

3a　本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数

第2章に詳細を示したが、今年度、本校の探究活動関連でお世話になった方は310件（3月15日現在）となっており、今年度の目標（300名）をやや上回った。探究活動の特定のゼミの連携数が突出しているという面もあるが、概ねどのゼミにおいても地域や外部の方との連携は進んでいる。昨年度からコンソーシアムが立ち上がり、加えてふくしま学（楽）会のつながりから外部の専門家ともつながることができ、外部連携を推進する環境が整ってきた。引き続き、外部の方の協力も得ながら活動の活性化を図りたい。グローカル型指定から2年で数値が倍増し、学校と地域の連携が質的にも量的にも深化していることが表れている。